

AMED 主催アジアでの社会実装を巡る国際シンポジウム開催！

(2022 年 12 月 9 日)

この 12 月 8-9 日にベトナムの多くのパートナーを招聘したのは、一つには前回ニューズレター第 29 号で取り上げた薬剤耐性 HIV への臨床現場の対応の在り方についての研修会。そしてもう一つのメインイベントはこちら「Asia Symposium on Social Implementation through the Asian Research Network under the COVID-19 Pandemic: From Research to Practice」。この国際シンポジウムは、日本医療開発機構 (AMED) の協賛、JICA と文部科学省の後援を得て、国際医療研究センター (NCGM) エイズ治療・研究開発センター (ACC) が主催しました。シンポジウムでは、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、アジアにおける国際共同研究は何ができたか、どうあるべきか、そしてそこでの研究成果をどう社会の実践に繋げるか (社会実装) について議論されました。日本の多くの研究機関代表者はもちろんのこと、研究パートナーであるタイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンなど ASEAN 各国からの参加を得る中、我々 SATREPS プロジェクトも、ベトナムのパートナーと共に参加しました。テーマは結核、マラリア、HIV/AIDS など、多岐に渡りました。

<p>プロジェクトリーダーの NCGM・ACC 岡センター長、NHTD・Dr. Giang との共同発表。</p>	<p>Dr. Huong 保健省 HIV/AIDS 予防局局長にも、ベトナムでの状況について発表頂きました。</p>

JICA と AMED が実施する「SATREPS」(科学技術協力) の枠組みを始め、これまで日本の多くの研究機関がアジアにおける医療、感染症分野で国際共同研究ネットワークを築き、実績を蓄積してきました。これらの活動は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けてある程度中断、遅延した部分があることは否めません。しかし、これまでの共同研究があったからこそ高まった対応能力、検査能力などは、コロナ禍でも役立ったとの報告もありました。新たな感染症は新型コロナウイルス感染症で終わるわけではありません、不断に迫る脅威は、不断の協力によって立ち向かうしかありません。国境を越えて新たなウイルスや感染症がやってくる時代であるからこそ、地域レベルでの感染症研究ネットワークは重要であると、多

くの発表者は主張しました。



人々が一堂に会すからこそできるネットワーク、これが得られたのもシンポジウムの成果です。

今回は同テーマで 2019 年に行われて以来、久しぶりの対面式シンポジウム（オンライン形式とのハイブリッド）となったことから、各発表者の講演からの学びも勿論のこと、会場における参加者同士のネットワーキングも積極的に行われていました。海外の研究パートナーとの旧交を温めたり、新たな立場・アイデアでの今後の協力への期待が意見交換されたりしたことは、対面で実施ができたシンポジウムならではの成果と言えるのではないのでしょうか。オンラインでできることの発見が多かったこの数年ですが、やはり人と人が実際に会って、時に雑談も交えながら、それぞれの思いを語り合う中で生まれる何かの大切さを、改めて感じさせられました。